左より母織子，父信一，加藤，妹久子．高等学校の頃．自宅にて

らかにすることに躊躇（ためら）いがない。

加藤の家族は、母親・加藤・妹による世界がつくられ、その世界に父信一は加われなかった。そして加藤は母親を強く敬愛し、妹を深く愛した。しかし、父親とは距離を置いた。母織子や妹久子に対して加藤が深い愛情を注いでいることは『羊の歌』のそこここによく描かれる。

ところが、加藤と母織子の関係にはもう一面があることに気づかされる。子どもの頃に悩まされた「悪夢」について語る件である。「巨大な車輪のようなものが近づいてきて、私を圧しつぶそうとする」夢や「うず巻きと共に深く落ちてゆく」夢……ここに述べられるふたつの悪夢について、どのように解釈すべきだろうか。

子供の頃の私は、しばしばのどを腫らして、熱をだした。そして高熱の度に、いつも悪夢に悩まされた。その悪夢のなかには、決して色もなく、音もなく、はっきりした形さえ見分け難かった。ある巨大な車輪のようなものが――それが車輪であったかどうかはっきりしないが、音もなく、ゆっくりと、しかし確実に近づいてきて、私を圧しつぶそうとする。圧しつぶされるときに、私が消えてなくなり、私の世界の全体が永久になくなってしまうということは、実にはっきりとわかっているが、どう逃れようとしても、逃れるみちはない。（中略）私自身がうず巻きと共に深く落ちてゆくこともあった。宇宙の全体が、うず巻きとなり、それが気体か液状のものかそれとも他の何ものであるかはわからず、とにかく廻転しながら限りなく深く吸いこまれてゆく。底に何があるかは私にわかっていない。おそらくそこには何もないのであり、無限に下降しながら、無限に私の世界――理解することのできるこの世界から遠ざかってゆく。その恐怖は、大きな車輪のようなものに圧しつぶされようとするときの恐怖と全く同じものであった。

（三五頁、改三九―四〇頁）

ユング派の人ならば、これを「グレートマザー」と関連させて解釈するだろう。「グレートマザー」とは、子どもに対して限りなく優しい態度で包みこむ母親であり、同時に子どもに対して圧倒的な力で支配しようとする母親である。そういう母親のもとに育つ子が見る夢であると解釈する。子どもだった加藤は、母織子のなかに、限りない優しさと、自分を支配しようとする圧倒的な力とを感じていたのだろうか。

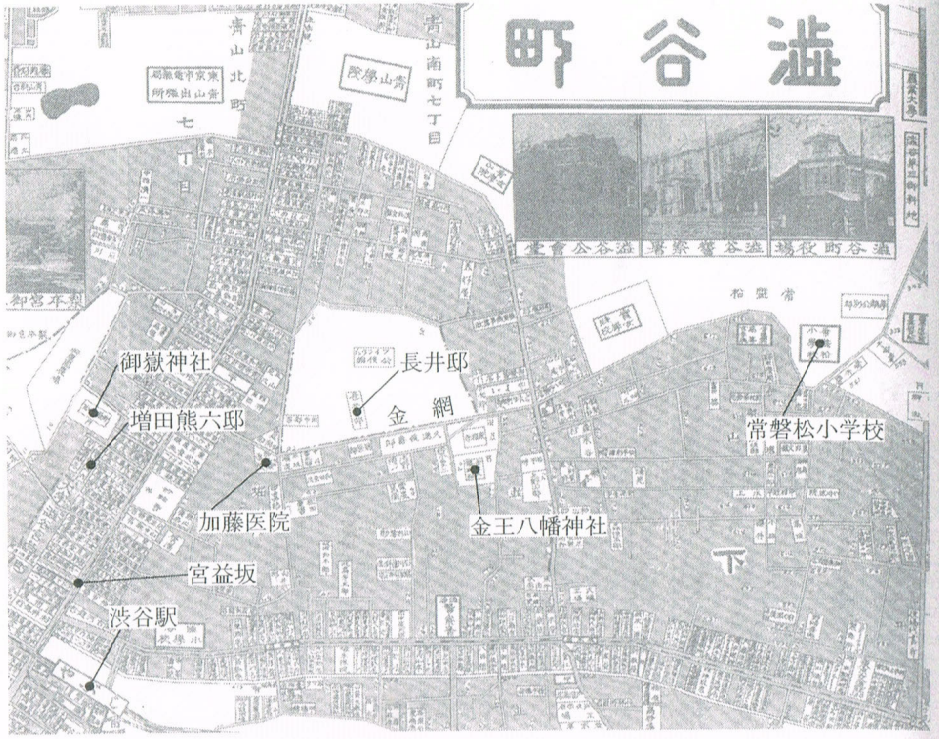
ふたつの夢は、得体の知れない、強い力で迫ってくるものがあることを加藤が感じとった、あるいは世の中に不可知なもの、不条理なものがあることを加藤がうすうす感じていた、ということを意味

いにもかかわらず、ウチとはどこかでつながっている関係にあることを、おぼろげながらに知った。それが石垣のことを述べた意味である。

とはいっても、未就学期に、このような「疎外感」や「余所者意識」について深く考えたわけではないだろう。だが、問題をおぼろげながらにも意識したとすれば、いずれ問題への対応を迫られるはずのものである。就学年齢に達して、加藤は渋谷町立常磐松小学校に通った。その頃のことである。

桜横町を通り、八幡の境内を抜けると、その頃の私は金王町の家のすぐちかくまで長井邸の金網に沿って歩いた。長井邸は広大な敷地に、木造の西洋館をいくつも建て、一九二〇年代の末にそれを西洋人の家族に貸していた。金網の外から見ると、西洋館の間には、よく手入れをした芝生と花壇があり、そこで異国の子供たちが遊んでいた。(中略)毎日学校の行き帰りに、金網の外から私は彼らを観察し、彼らの方では、何人の子供が金網につかまって中を覗いていても、全く気にもかけず、決してこちらを見ることがなかった。金網はあまり高くなくて、乗り超えようと思えば、乗り超えられなかったわけではない。誰もそれを乗り超えようとしなかったのは、金網が単に物理的なものではなく、心理的なものでもあったからだろう。彼らは私たちを見たことがなかった。彼らにとって私たちは存在しなかった。(中略)私自身は、長井邸の芝生と、桜横町の雨にぬかる道との間に、全く関係がないばかりでなく、そもそもいかなる関係も成りたち得ないだろう、という動かすことのできない印象をもっていた。

(五八―五九頁、改六五―六六頁)



1925年12月に東京交通社より発行された「渋谷町」の地図

金王八幡宮の近くに、日本近代薬学の開祖といわれる長井長義(一八四五〔弘化二〕―一九二九)の大邸宅があった。「長井邸」は今日の渋谷区渋谷二丁目(現在、六本木通りの脇に建つ長井ビルのあたり)に位置し、その敷地は一万坪を超えていたという。その広大な敷地には、日本と外交関係をもって間もないフィンランドの公使館があり、外交官とその家族たちが暮らしていた。その「異国の子供たち」は「決してこちらを見ることがなかった」。西洋人家族と加藤ら日本人とを隔てていたのは「金網」である。金網は、ふたつの世界を峻別し、ふたつの世界に属する人たちはそれぞれに別の世界に生きていることを意識させる。

「彼らは私たちを見たことがなかっ

然科学を専攻し、卒業しては社会に貢献し、名誉も手にする、という類のものであったろう。目指すは「末は博士か大臣か」であり、詩人や作家は含まれていなかった。そこには小学校を五年で卒業し、中学校を四年で修了すること、すなわち二度「飛び級」することを含んでいたろう。そういう期待からすれば、「「つまらぬ小説」に凝っている息子に満足しなかった」(九九頁、改一一二頁)のは当然である。「文芸の閑事はいかに社会の役にたたぬものであるか」(同上)という主張が、あるいは父信一がもつ文学観であったかどうかは分からない。しかし、文芸に従う者は高等遊民であり、質実剛健の者がとうてい能くすることのできぬものであるという考え方は、戦前にはごく一般的であった。

一方、母織子は「たとえ社会の役にたたないとしても、詩文の美しさというものがあり」、「たとえ小説を読んでいても、高等学校の入学試験に通りさえすれば、側からあまり文句をいわない方がよい」(同上)という考えの持ち主であった。加藤がどちらの考えに共感をもったかは明らかだろう。

ともあれ、このように父信一と母織子の意見の違いが繰りかえし紹介され、その都度、父信一と加藤との疎隔が拡がっていくように読める。

「悪夢」という小説

戦後になって、加藤は「悪夢」(『人間小説集』鎌倉文庫、一九四七年一二月号。「道化師の朝の歌」第一章として短編集『道化師の朝の歌』河出書房、一九四八所収)という小説を書く。加藤が育った家庭と同じように、両親と中学生の僕と妹が暮らす家庭が舞台であり、そこに両親のいさかいが描かれる。その迫真的な口論は、とうてい想像でもってよく書けるところではない。この小説が書かれたとき、加藤は

すでに結婚しており、加藤と妻綾子とのあいだにもいさかいはあったろうが、内容から推測して両親のいさかいが写しとられたものであろう。

父信一と加藤とのあいだもまた折合いが悪かった。父信一は「文学青年」を蛇蝎のごとくに嫌い、加藤が文学に入れあげはじめたときには、「よりによってわが息子が文学にはまるとは……」という心境であっただろう。信一は加藤が科学者になることを期待し、工学の道に進むことを望んだ(本村久子氏談)。医学の道を勧めたのは母織子なのである。加藤が若いときには、しばしば父とのあいだに激論が交わされた。長ずるに及んで激論はなくなったが、会話もなくなった。「晩年に至るまであまり口をきかなかった」と加藤のパートナーだった矢島翠はいった。折合いのよい夫婦だったとはいえないにもかかわらず、その家庭が暗くならなかったのは、ひとえに妹の力である、と加藤は信じていた。

小説「悪夢」でも、家を飛び出そうとした「僕」を、家に留めたのは「妹の眼」である。

——出て行け。

——あなたこそ出るがいゝ。こゝはあたしの家だ。

怒号、悲鳴、硝子の割れる音、——その時僕は、着物を着換へて、階段のところまで来てゐた。争ひの間に入るためではなく、争ひから離れるために。一歩降りると、階下の居間の騒ぎは耳の傍に聞え、その音に混るやうに、梅雨どきの暗い階段の湿つた黴くさい匂ひが、強く鼻を打つた。その幾度となく朝毎に嗅いだ匂ひは、その時、僕のなかに、この家ですごした長い年月を一瞬の

間に再び甦へらせ、悔恨や涙や諦めと共にすぎた多くの夜と昼とをよび戻し、こゝが僕の家であつたことを深く感じさせたが、さう感じさせることによつて、今こゝが僕の家ではないことを、思ひ知らせた。こゝはあたしの家だと言ふ母の言葉は、父の暴力を誘ひだしたにちがひないが、父を傷ける単純な真実であるのみならず、別の意味で僕にとつてもそれ以上に痛い真実であることを、その言葉を夢中で、しかし効果を充分に測つて後に叫んだ母自身は、少しも気がつかなかつたにちがひない。階段を降りながら、耳には居間の騒ぎをはつきりと聞きわけながら、僕のなかでは、こゝが僕の家ではないといふ意識が、次第に、朝の夢のなかの意識へ重なつて行く。僕は確かに覚めて階段を降りてゐるのだが、階段はもはや階段ではなく、何かわからぬ空間であり、父と母とは居間で争つてゐるのだが、もはや居間で争つてゐるのではなく、何か海のやうな流れに、浮き沈みしながら僕の傍を遠ざかる。足は確かだし、もう悪寒も大分前に去つた。しかし、階段を降りる時間は、夢のなかで流れてゆく父や母を見つめてゐた時間に他ならず、おそく、しかし、確実に、避け難く、ある終局に向つてすゝみ、何ごとかゞ遂におこらざるを得ないといふ宿命的な予感に、充たされてゐる。その時間が息づまるやうに過ぎ、次第に強く張り徐々に引きのばした糸が、将に切れようとする瞬間に、――一方では、こゝが僕の家ではないといふことを心のなかで繰り返し、この家を出ようといふ決心を、全く意識的に、かためてゐたのだが、――ちやうど夢のなかで妹の歌がいきなり僕の耳を打つ正にその瞬間に、僕は、現実の妹が、と言つても妹も亦父と母との流れる同じ流れのなかに、遠く感じられたのだが、階段の下にたつて、不気味なほど大きな眼を見開き、幽霊のやうにぢつと僕を見つめてゐることに気がついた。

（「悪夢」『道化師の朝の歌』一六六―一六八頁）

両親のいさかいを前にして、加藤は家を出たくなるような心境になったこともあったのだろうか。しかし、それを思いとどまらせたのは、妹だった。実際、妹久子の加藤に対する影響力は、きわめて大きかった。甥の本村雄一郎は「伯父〔加藤〕は、最後まで母〔妹久子〕に頭が上がらなかった」という。

4　悪夢と「魔王」

なぜ「悪夢を見た」のか

一枚の写真が遺されている。加藤が第一高等学校に通っている頃の写真である（次頁）。家族四人が自宅の縁側に座っていて、前列中央に加藤が胡坐をかいている。その左右に母親と妹が手を前に組んで正座する。三人からは笑みがこぼれる。父親は三人のうしろに控えるように座っている。その存在感はうすい。そして前列三人のなかに入りきれていない感じを受ける。写真を見たとき、これは加藤の家族関係を象徴していると思った。子どもたちは父親よりも母親に親近感を抱いていて、それを明

M. M.

M.M.は語りました、僕は小説によって人生を知ろうと思って小説を読んで来たと。勿論小説によって知られる人生とはこの場合未知の社会の風俗に過ぎない。下らぬ読み方をしたものである。しかし問題はその下らなさではない、彼は節によって、彼は美学によって小説を読む下らなさのそれに幾倍するかと云ふことだ。この点M.M.はとにかく小説を理解して来たらしい。

Y. T.

Y.T.は近頃自然物をみり直してゐる。自然物の変らない記憶だ。従って、彼の若々しい所以である。

父

私は父の或る性格を理解して、それを理解しようとしなかった。理解出来ることを余りにはっきり知ってゐたからだ。

母

母は勿論私より偉らい。私は母の何物をも理解しないが、母の偉らさだけは理解してゐる、母の愛情だけは。

N氏

N氏は作家を知ったから、作家にだけはなるまいと云ふたらしい。しかし作家を最も知りたくなったのである。大抵の作家は、さうであった、人生に対して。